

阿波國 すきま 漫遊記

VOL.19 養蚕 (後編：壮蚕飼育～製糸)

[取材・文・写真] 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだされることがないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 <http://www.sukima.com>



■猪口家の上族(じょうぞく)

繭作りの準備が整った蚕を「蚕(まぶし)」と呼ばれる紙の枠に移す。この作業を「上族」という。数万頭の幼虫が半日-1日のあいだにいっせいに繭作りの体勢になる。作業が遅れると、飼育台で繭を作り始めてしまうので一刻を争う作業だ。猪口家では上族のときだけ、「縄網」という昔ながらの手製の網を使用する。現代ではほとんど使われなくなった養蚕用具だ。

猪口家の養蚕

美馬市山川町の養蚕農家、猪口家を知ったのは偶然のことだった。以前から気になる桑畑があって、ある日思い立ってその持ち主を探して訪ねてみた。それが猪口家だった。そこで徳島の養蚕が今年で終わりになることを知った。農協から農家に対して終了が告知されたのが5月。私が訪れたのは8月上旬で、年3回ある飼育の2回目目がすでに終わっていた。残るは「晩秋蚕(ばんしゅうさん)」という9月の飼育1回だけである。無理にお願いして密着取材させてもらった。

前号で紹介した稚蚕飼育所で2齢幼虫の終わりまで育てられた蚕が、農家に届けられたのは孵化から7日目のことだった。幼虫はその日のうちに脱皮して3齢になる。そのあと2回脱皮し、孵化から日数24日目に繭を作る。

よい繭を作る最も重要な要素は良い桑葉を作ること。50年以上、養蚕を専業としてきた猪口さんは「蚕のコトバ」がわかる。「蚕のことなら目をつぶってもできる」と言うほどの養蚕のプロだ。

▲桑の取り入れ

よい繭を作る最も重要な要素は良い桑葉を作ること。50年以上、養蚕を専業としてきた猪口さんは「蚕のコトバ」がわかる。「蚕のことなら目をつぶってもできる」と言うほどの養蚕のプロだ。

▲桑葉の採取(じょうそうい)

昭和35年ごろから始まった枝ごと給繭する飼育方法。そのころから、安い外国産繭や化学繊維に対抗するため、養蚕の機械化、大規模化が模索された。しかし徳島で最後まで営農できたのは人力に頼った小規模な養蚕だった。

▲5齢幼虫

蚕の1-3齢を「稚蚕(ちさん)、4-5齢を「壮蚕(そうさん)」と呼ぶ。この写真は繭を作る2日前くらいの様子だ。蚕は紀元前から家畜として改良されてきたので自然の環境では生きられない。養蚕がなくなれば蚕の姿も見られなくなる。

▲回転族(かいてんぞく)

「回転族」という紙枠に移された蚕は、繭を作る場所を探しながら上へ上へと移動する。1区画に2頭の幼虫が入ってしまうと「玉繭」という不良品になる。蚕が上へ集まるとその重みで回転し、蚕が一箇所に集まるのを防ぐ仕組みだ。



▲薫族(わらまぶし)

徳島では「こあら」とも呼ぶ。回転族が登場する以前の時代に使われていた古い形式の族。猪口家では、予定より早く繭を作り始めてしまった蚕を薫族に移しておく。薫族を使うと、動き回らずにすくすくその場所で繭を作り出すという。



▲出荷の朝

回転族から外して、床に広げておいた繭を袋詰めする。繭は呼吸をしているので積み重ねると蒸れてしまうのだ。このとき不良品を選別する。今年も飼育期間が好天に恵まれ例年にならぬ上作で、不良繭が少なかった。



▲選繭台(せんけんたい)

農協の集荷場へと運ばれた繭は、計量され、製糸会社の袋に詰め替えられる。このとき再び選繭台で不良繭を選別する。山川農協管轄の養蚕農家は2軒。最後の繭は、特別なせしモ二一もなく、数人に見送られて静かに出荷された。

猪口家の養蚕の特徴は、部分的にはあるが古い時代の道具を使っていることだ。縄網や藁族は民俗資料館などで展示品として見ることはできるが、道具が使われているときに「ぞ輝いて見える。しかし残念なことに、ここで紹介した道具と仕事は、もう徳島県では見ることができないのである。

徳島県の製糸

農家から出荷された繭は製糸工場で「生糸(せいし)」に加工される。生糸とは繭をほどこいて繊維を一定の太さに揃えたもので、糸の原料である。生糸を糸にするには、「精練」として表面の蛋白質を取り除いたり、「撚糸」として糸にヨリを掛けたり、染色する行程が必要となる。そうして出来た絹糸を織ってやっと絹織物になる。和服1着分の布を作るには、約98kgの桑葉が必要になると言われている。意外に少ない原料と言えないだろうか。

徳島は関西では有数の養蚕県だった。鴨島には筒井製糸や片倉製糸の大工場があった。かつて繁栄したが、いまはその面影を探すのはむずかしい。今年徳島で作られた繭は、長野県の宮坂製糸という

製糸会社に出荷された。繭を煮ないで、中のサナギが生きたまま繰り糸する技術を持った工場だ。国内にはもう製糸会社は4社しかなく、関西にはもう四国で最後まで製糸を続けたのは、高知県藤村製糸である。大量の繭を扱うには、蚕が蛾にならないように高温でサナギをミイラ化させる「乾繭」という行程が必要となる。乾繭させれば繭は倉庫で保管がきくようになる。美馬市山川町には藤村製糸の乾繭工場が残っている。養蚕王國だった徳島の姿を伝える貴重な産業遺産だ。



▲藤村製糸乾繭工場

敷地は川田駅のすぐ横なので、汽車の窓からよく見える。1923年にグンゼが建てた工場場で、1958年に藤村製糸が買い取って、2005年まで操業した。木造の外観は建築当初のまま。木造大梁構建築としても凄い迫力がある。



▲乾繭工場内部の様子

工場の見回りに来た藤村製糸の会社の人が頼んで工場内を見せてもらった。内部はよく残っている。見モノは、この「多段バンド型移動式繭乾燥機」家ほどある大きさの機械だ。あまりの大きさのため、繭投入口は2階にある。



▲検定用自動繰糸機

繭は製糸工場へ出荷されると同時に検定所へもサンプルが送られる。検定所には製糸をシミュレーションする繰糸機があって、繭のほどこやすさを調べる。これによって繭の等級が決まり、農家からの買い取り価格が決まったのだ。



▲繰返し機

繰糸機によって繭からほどかれた生糸を一度やわらかく巻き直して扱いやすくする。この行程を「繰返し(あけかえし)」という。生糸製造の最終工程だ。繰糸機や繰返し機は、美馬市の蚕糸記念館で見ることが出来る。



▲生糸

繰返し機から外した生糸。この糸の単位を「錠(かぜ)」という。生糸は触るとひんやりとしていて、シュッシュという音がする。「絹鳴(きぬなり)」という生糸独特の音だ。今、日本国内で売られている絹製品のうち、国産の繭の使用比率は0.5%程度しかない。